

一

問六							問五	問四	問三	問二	問一	
戦争の記憶	た	い	が	で	、	み	<p>「この人たちのことでは、僕も頭もいっばいなので、僕は僕がだれであるかという表現から、それを喪失して「名前」とは、まさに「一個の独立した人格を示すものであり、それを共有している被爆者の一部に過ぎない」と考えている。</p>	<p>抱かせるものだった、というこ の現状に比べて、何の記憶の断片のほうがいっそうリアルテイがあり、生の実感を感じて、愛情より母親がもたらした言葉、実感を伴って理解できたというこ 抱かせるものだった、というこ の現状に比べて、何の記憶の断片のほうがいっそうリアルテイがあり、生の実感を感じて、愛情より母親がもたらした言葉、実感を伴って理解できたというこ</p>	<p>本川付近で見つかった妹の亡骸が、生前の姿からあまりにもかけ離れた無残なもの、愛情より恐怖心の果てた姿を、実感を伴って理解できたというこ 抱かせるものだった、というこ の現状に比べて、何の記憶の断片のほうがいっそうリアルテイがあり、生の実感を感じて、愛情より母親がもたらした言葉、実感を伴って理解できたというこ</p>	<p>オ</p>	a	かわも
の	だ	か	も	と	し	b					えしやく	
憶	が	私	また	それ	で	<p>c</p>					<p>けはい</p>	
を	日	”	ち	の	こ							
受	か	”	の	記	こ							
け	”	私	ち	憶	と							
継	”	また	の	”	が							
い	”	それ	の	”	そ							
で	”	ち	の	”	れ							
い	”	の	記	”	を							
く	”	憶	K	”	私							
こ	”	神	が	”	る							
と	”	父	そ	”	に							
が	”	が	を	”	は							
で	”	一	語	”	と							
き	”	語	私	”	り							
る	”	ひ	に	”	あ							
。	”	こ	と	”	ま							
	”	と	り	”	記							
	”	人	が	”	憶							
	”	で	で	”	を							
	”	抱	き	”	、							
	”	え	る	”	重							
	”	込	ん	”	日							
	”	を	ん	”	、							
	”	ん	日	”	重							

200 150

二

問六											問五	問四	問三	問二	問一
「知の外部	工	<p>インターネットを中心とするデジタルメディアは、時間と空間の制約を超え、誰しもが発信者となるネット上の膨大な情報に際限なくアクセスできるといふ環境を人間に与えた。それによって、人間のコミュニケーション、意識と行動のあり方、そして文字と出版を基底とした「近代の知」を無効化しつつあるということ。</p>	<p>地球環境の危機を自身の生存の危機と捉え、行動に移さなければならぬ事象を深めた江戸の知識人の姿勢が、今後事態の改善に向けて求められるものだから。</p>	<p>ウ</p>	a	飛躍									
へ	<p>b</p>				<p>定位</p>										
外部						<p>c</p>	<p>警鐘</p>								
内								<p>d</p>	<p>象徴</p>						
に										<p>e</p>	<p>常態</p>				
化															
「															
性															
と															
希															
人															
間															
主															
体															
・															
身															
か															
ら															
離															
れ															
た															

300 250 200

三

問一	問二	問三	問四	問五	
A ウ	ア 八	① (亡くなった方は) 墓の中でも生前愛した桜花を見たいとお思っているだろう。 ③ 桜花は、何も言わないので、どうすることもできない。	桜花は、一つには過ぎ行く春の情景を思い起こさせるものであり、さらに、亡き人を思い出すための手がかりの品でもあるというこ と。	風情ある桜花を手がかりに最近亡くなったり忘れていた自分の薄情さを 悔やみつつ、亡くなったか死ぬと分かっているものだ、歌を詠 あまりに年若くして亡くなった子の無念さを思い描きながら、歌を詠 んだところ、深く悲しみた人の無常さを思い知らされて、思わ ず今日の出来事を記録してしまっ た、ということ。	
B エ	イ のみ				ウ ど

四

問一	問二			問三
① 乳雀	② 書き下し しゅうあえてゆくものなし	③ 書き下し よろしくゆくべしと。	④ 書き下し ついにことばをあらためず。	信綱が光を庇って、決して家光の指示で屋根に登ったとは認めな かった様子を見て、将来、我が家光の将軍になつた時には、信綱に感 心する思い。 は家光のまたない忠臣となることだ ろうと、將軍秀忠が信綱に感
⑤ 信綱	現代語訳 家光の家来たちは、決してその 屋根に登ろうとしなかった。	現代語訳 お前が屋根に登るのがよいと。	現代語訳 とうとう最後まで、自分の為 にやっただけという言葉を 取り下げなかった。	